

「となり町戦争」と「東海道戦争」

— 知らない戦争のリアリティーを追う —

内田 友子

一、「悲鳴の練習」が想定すること

二年前の秋、下校中の小学生が誘拐され殺害されるという事件が、広島、栃木とたて続けに起こった。それを受けて全国の学校や地域社会ではすぐに町内パトロール等の対策が講じられ、防犯という観点から子ども向け携帯電話の開発が進んだ。そのような取り組みの一環として、学校で「悲鳴の練習」も始まった。とっさの場合に大きな声で周囲に助けを求められるようにと、子どもたちに「悲鳴」をあげさせるという練習がしばしばテレビのニュースで紹介されるようになった。当の子どもたちはというと、普段は静かにしなさいと注意されるほうが（たぶん）多いだろうから、晴れて大声解禁というもの珍しさからか先生の掛け声に合わせ元気に「悲鳴」を張りあげていた。

その様子を眺めながら、妙な気持ちになったことを記憶している。

この練習は、たとえば教室で机の下に潜り込んだり口をハンカチで押さえて校庭へ速やかに集合したりする練習とは明らかに違う。想定されているのは、意図を持つ何者かに誘拐され殺害され

るという事態だ。

画面に映し出される子どもたちの嬉々とした表情に釣られて、彼らが向き合っている事態のなまなましさをつかり見過ごしうになつていた。よくよく考えれば「悲鳴の練習」とは、またずいぶんとうす気味悪いものだ。

二、イメージする戦争

二〇〇五年に直木賞候補にあがった三崎亜記「となり町戦争」^①は、目の前に展開される現実と、自らが立たされている事態とのちぐはぐさに終始戸惑っている男の物語である。ある日突然、隣接する町との間で戦争が始まる。「僕」が住む町の「広報まいさか」でそれは知らされ、原因も明らかにされないまま公共事業として淡々と進められる。ごく普通の会社員「僕」は、「戦時拠点警察業務従事者」に任命されその戦争へ巻き込まれていくが、彼はいま自分が戦争に従事していることのリアリティーがなかなか掴めない。しかし「広報まいさか」の町の人口の動きを知らせる欄には「戦死者」の数が載るようになる。戸惑う彼に対し、役場職員の高西さんは次のように語る（傍線内田。以下同じ）。

「なんだか、ぼくがイメージする戦争と、まったく違う形で、違う手順で戦争が行われているんですね」

「私たちには条例どおりの手順を踏んで業務を遂行するしか術はないんですよ」

「ただぼくには、この町がやっている戦争つてものがまったく見えてこないし、いったい何のために戦っているのかも見

当がつかないんですよ」

「おっしゃることはよくわかります。過去の戦争が、私たち
の記憶の彼方へと消え去って久しい時間がたちました。役場
の中にも実際に戦争を体験した、という人間はもはやおりま
せん。ですから私たちそれぞれが、自分の持っていた戦争の
イメージと、現実に分ちたちで遂行する戦争のギャップに苦
しみながらも、現実の戦争の各場面に応じた対応を積み重ね、
協議を重ねつつ対処しているのが現状です」

そう言う香西さんの言葉の中に、僕は苦しみを感じられな
かった。香西さんは、論すように僕に語りかけた。

「戦争というものを、あなたの持つイメージだけで限定して
しまうのは非常に危険なことです。戦争というものは、様々
な形で私たちの生活の中に入り込んできます。あなたは確実
に今、戦争に手を貸し、戦争に参加しているのです。どうぞ
その自覚をなくされないようにお願いいたします」

（「となり町戦争」 38～39頁）

作者の三崎亜記は一九七〇年生まれ。「戦争のない、平和教育
の中で戦争を否定されてきた私たちの世代にとつての戦争を書き
たいとの思いが、湾岸戦争以来ありました。しかし私は戦争のリ
アルを書けません。そこで考えたのが、自分が戦争を描けないこ
とを逆手にとつた物語です」（「西日本新聞」二〇〇五年一月六日）
と創作の動機について語っている。また、次のようにも説明して
いる。⁽²⁾

こんな奇妙な物語を思いついたきつかけは、湾岸戦争だった。
テレビに映し出される光の下で人が死んでいるのに、何のり

アリテイーも感じないで映像をみている。「あの戦争につい
ては遠すぎて見えない、といいわけも出来る。では、身近で
戦争が起きたらどうなのか。やはり見えない状況があり得る
んじゃないか」。殺りくや血なまぐさい残酷なシーンをあえ
て描かないことで、映像のスペクタクルが無機質なデータと
してしか戦争を表象し得なくなっている私たちの現実認識の
あり方を皮肉っているのだ。

一九四五年以降この六十二年の間、戦争体験は繰り返し語られ、
戦争をテーマとした映画もたくさん作られた。夏になればテレビ
で必ず特集番組が組まれる。そして、そのような語りや映像にす
っかり慣れてしまった私たちの中に穿たれつつある陥穽に、この
小説は焦点を定めている。

三、イメージが封じ込む現実

「となり町戦争」のほぼ四〇年前、筒井康隆は「東海道戦争」
（『SFマガジン』一九六五年七月）で、東京と大阪との間である
日突然始まった戦争を描いた。ちなみに六四年には東海道新幹線
（東京―大阪）が開業している。戦闘や血なまぐさい殺りくの場
面が一切発生しない「となり町戦争」とは反対に、この作品では
市民を巻き込む戦闘や流血のシーンがスラップスティック・コメ
デイの手法によって騒々しく展開される。

登場人物たちの身も蓋もないような暴言やブラック・ユーモア
でもってこの作品が辛辣に風刺しているのは、一九五〇年代後半
から国内で台頭し始めたテレビというメディアだ。特に五九年の

皇太子（現天皇）成婚パレードの中継や六四年のオリンピック開催といった「イベント」はその普及に拍車をかけたとき、「東海道戦争」はそのような背景を踏まえて発表された作品である。

東京と大阪が戦争を始めた理由について、主人公「おれ」は、テレビ局に勤める友人に詰める。

おれは椅子を引っぱってきて、彼の横に腰を据えた。「何故東京は、大阪を攻撃するんだ？」

「大阪が東京を攻撃する準備をしているというニュースが伝わったからだ」

「じゃあ、何故大阪が東京を攻撃するんだ？」そう訊ねてから、おれはあわてていった。「東京が大阪を攻撃するからなんだ、いわないでくれよ」

「だけど、その通りなんだ」彼はいった。「そうとも。どうどうめぐりだ」

「なぜだ！ なぜだ！」

「怒鳴るなよ。つまり、そういう期待があったからだ。戦争という事件への期待、そして、そういう事件を起こすことのできる、自分たちの能力についての期待だ」

「自分たちというのは誰だ？」

「大衆だ。あるいは事件を望む人間のすべてだ」

（中略）

「こんな時、何が原因か判るか？ 事件の当事者だって、誰が行動の主体で、命令系統がどうなっているかわからない時、市民が現実を正しく評価するのは不可能に近いんだ。どれもこれもみんな仕組まれた騒動だ。擬似イベントだ」

「つまりお前は」おれがいった。「大衆がニュースに餓えていて、マスコミがその需要に応えて、この戦争をでっちあげたというのか？」

「その通りだ」彼は答えた。〔東海道戦争〕19〜23頁

この作品のモチーフとして筒井が採用しているのが、ダニエル・J・ブーアスティン『幻影の時代―マスコミが製造する事実』（東京創元社、一九六四年十月）である。「擬似イベント」という言葉はブーアスティンによるもので、「自然発生的でなく、誰かがそれを計画し、たぐらみ、あるいは扇動したために起こるもの」であり、「擬似イベントは、いつでもそうとは限らないが、本来、報道され、再現されるという直接の目的のために仕組まれたものである。それゆえ、擬似イベントの発生は、報道あるいは再現メディアのつごうのよいように準備される。擬似イベントの成功は、それがどれくらい広く報道されたかということによって測られる」と説明されている。

「擬似イベント」が擬似として発生しながらも野次馬たちを巻き込んでなまなましい現実へとすりかわっていく様を「東海道戦争」はシニカルに描く。たとえば全編は十一章に分けられているが、その各章のタイトルとしてあてられた「スポット」「イントロ」「マエコマ」「Aロール」等々の業界用語（？）は、異常な事態に翻弄される「おれ」の姿を、まるで正確に構成されたテレビ番組のように客観的に突き放す。またラスト・シーンで背広姿の「おれ」は手榴弾を片手に敵の装甲車へ突進するが、「手を振り上げたとき、装甲車の砲口が音なく輝き、衝撃があり、装甲車に向かつてなおも走っていくおれの首のない後ろ姿を、吹きとばさ

れたおれの首は一瞬見た」というように、「おれの首」はあくまで映像として印象的かつ効果的なカメラ・アングルを見出してしまおう。

関井光男はこの作品について、次のように解説する。³⁾

筒井康隆の作品の過剰さがここにあるが、グラフィック革命以後のイメージの増大していく社会のなかで、これはまったく新しい虚構の方法であったといっている。イメージが増大していくと、社会の輪郭は不鮮明になり、現実はず小になっていく。イメージの真実らしさが新しい価値として現実を封じ込めてしまうのだ。

この、イメージに封じ込められる現実、というのは、図らずも先の三崎が言う「映像のスペクタクルが無機的なデータとしてしか戦争を表象し得なくなっている私たちの現実認識」という昨今の状況に脈々と通じている。

四、探される「リアリティー」

「となり町戦争」と「東海道戦争」は作風も発表された時代背景もまったく異なるが、どちらの主人公も（戦争）に現に巻き込まれているにもかかわらず、リアリティーを獲得するために既存の「戦争のイメージ」をなぞろうとするという共通点があることは興味深い。

だけど……、だけど香西さんを癒すことはできないだろう。戦争を感じ取れない僕には、戦争の痛みを感じることもまた、できないのだから。

そして僕の中では、再び無声映画のようなモノクロの戦争シーンが繰り返される。戦車が砂塵をまきあげ、壊れた壁に隠れて歩兵が榴弾を投げ、それがきれいな放物線を描いてモノクロの青空を行き交う、様式美を備えた戦争だ。

「ぼくにできることだったら」

もう一度そうつぶやく。確かに僕はそう言った。自覚も覚悟もないままに。 (「となり町戦争」43〜44頁)

自分が何のためにこの空間にいるのかがわからなくなる。

(略)僕は僕の中のリアルを失う。僕は、今、何の、ために、歩いて、いる、のか。

「まず、五十、メートル、右に、曲がって、二百、メートル、左に、曲がって、三十、メートル」

一歩踏み出すたびに念仏のようにそう唱えていった。そうでもしなければ自分がここにいることすらリアリティーを失ってしまいそうだったからだ。いつか見た戦争映画のように、この暗渠の先に光が広がる時を待った。でもそんな戦争映画を見た覚えはなかった。そう、僕は僕の中の普遍化された戦争のイメージを、今歩いているのだ。(「となり町戦争」109頁)

中継車がやってきて、武器の手入れをしている男たちに、テレビ・カメラを向けた。男たちは、掃除したばかりの銃を、もういちど磨きはじめた。

「ええ、ちよつと何か、うかがって見ましよう」

アナウンサーがマイク片手に、男たちに近づき、二十五、

六歳の若者に話しかけた。

「恐ろしくは、ありませんか？」

「平気だよ」彼は短い煙草を横つちよにくわえたまま、小銃を磨き続けた。

「なかなか勇氣のある方です。——ええ、あなた、この戦争をどう思いますか？」

「戦争は嫌いだけど」彼はわざと、ぶつきらばうに答えた。

「でも、誰かがやらなくちゃね」アクション俳優の誰かの真似をして、煙草をプツと吹いて捨てた。

〔東海道戦争〕 36～37頁

よしやつつけてやると思った時のおれはやはり、戦車の登場する戦争映画のシーンを、参考のために頭の中で反芻していた。背広のポケットに右手をつっこみ、手榴弾を握りしめた。島の中を、装甲車めがけて走った。できるだけ近づいてから投げつけてやろうとした。装甲車は砲口をこちらに向けた。おれは走りながら、歯で手榴弾の信管を引き抜いた。

〔東海道戦争〕 48～49頁

「東海道戦争」では先にも述べたように、「おれ」はでつちあげられた擬似イベントの渦中へ巻き込まれていき、最後にはその大がかりなイベントの登場人物の一人と化して壮絶かつ印象的な構図の中で破滅していく。つまり、イメージと現実とのすり替えが完全に行われたところで作品は閉じられる。

一方「となり町戦争」では、結局「僕」は最後まで戦時下に自分がいいたというこのリアリティーに悩む。だが、「予定通り」

に戦争が終った後の町を車で走ってその痕跡を探そうとするうちに、「僕」は別のリアリティー、言わば自分の中に果食している危険の手ごたえを、明確に得ることになる。

割れた窓、銃撃でえぐられた塀、焼失した家屋、そして戦死者の屍。血痕。何ものをも見落としたくはなかった。不意に、あのおかつぱの男のコトバが蘇ってきた。

「トウサツは盗み撮りの盗撮じゃなくって、倒れると撮影で倒撮、戦死写真の撮影のこと。戦争楽しむのにも派閥があるってコトですよ」

僕の中でそのコトバが繰り返された。僕は、彼のように「戦争を楽しむ」気はない。でも今、まるで間違い探しをするかのように、戦争の痕跡を探している。ある意味楽しんでる自分と、それを戒める自分が存在する。まるで、事故や災害を特集したテレビ番組を、眉をひそめながらもわくわくして観てしまうように、自己の絶対的な安全性が確保された場所では、人の災難ですら娯楽になり得るのだ。

だが結局、戦争の痕跡はなんら見つけだすことができなかった。僕は、あきらめてため息混じりに車を加速させた。

ため息が安堵から生じたのか、失望から生じたのか、僕自身にもわからなかった。

〔となり町戦争〕 164頁

六十余年をかけて築き上げられた語りと、それに基づく映像やイメージの上に立つ世代によって今度は、戦争体験がないことから生じる恐ろしさを語る、とでもいうべき語りの試みが胎動し始めている。

注

1 「となり町戦争」の引用は、『となり町戦争』（集英社、二〇〇五年一月）による。「東海道戦争」の引用は、『東海道戦争』（中央公論社、一九七六年二月）による。

1 初出は「小説すばる」二〇〇四年十二月号。第十七回小説すばる

新人賞。〇六年には渡辺謙作監督により映画化された。主演、江口洋介、原田知世。

2 「表現者の現場」（「YOMIURI ONLINE」
<http://www.yomiuri.co.jp/index.htm> 最終確認日二〇〇六年三月五日）

3 関井光男「作品への視点・筒井康隆の世界」（『國文學 解釈と教材の研究』一九八一年八月号）